

大学出版

2001.6 No.49

夏

大学と社会を結ぶ知のネットワーク



大学出版部協会

能楽の四季——夏 ■ 中西通 ——表 2

特集* 学術情報の発信

学術情報とオンライン・ジャーナル ■ 潮木守一 —— 2

これからの学術情報流通における

インターネットの役割 ■ 岡本真 —— 6

「助成出版のすゝめ」序説 ■ 堀井健司 —— 10

読書の周辺 待たれる全国「名書」鑑評会 ■ 斎藤和明 —— 13

科学する目 2 生物の種類 ■ 青木淳一 —— 18

歩く・見る・聞く 知のネットワーク 22 東北大学附属図書館とその付近 —— 20

大学出版部ニュース —— 22

製作の現場から 24 —— 32

デジタル出版最前線 2 —— 表 3

能楽の四季

中西 通 (能楽資料館 館長)

夏



能舞台の下の大甕

丹波篠山の能楽殿は文久元(一八六一)年の建立である。時代的にはさほど古くはないが、式楽時代のもので完全に残っているものは全国的にも少ない。しかも棟札には、仕事にかかわったあらゆる職人の名が記録されている。

明治以降は演能の回数も少なく、通常は兩戸が立て掛けられており、毎年十月十六、十七日の神社の祭礼が行われる神嘗祭のときであった。この町に生まれ育った者、特に男子は成長とともに祭とのかかわりが変化し、太鼓御興や鉾山の乗り子から長じて御興の担ぎ手となり、若者ぶりを誇示する。

話が外れたが、この舞台の下に音響効果のためであろう大甕が配置されている。祭でないときは境内は子どもの遊び場、床下の大甕はかくれんぼの絶好の場所であった。

この大甕、現在残っているのは本舞台の下に五個、後座に二個の七個。橋掛りの下にあったといわれる四個は今はない。

確かに甕の上で手を叩いただけでも響鳴があるのだから、演能上かなり重要な役割をもつ足拍子の重々しい響きには工夫をこらしたのである。陶器の用途としても格別のもので、昔の人の発想の豊かさに関心する。これは、ホールや仮設の舞台での観能の際、いつも感じさせられることである。

篠山の舞台の場合、甕の大きさは口径約七十五種、高さ約一米である。その口の部分を舞台中央に向けて配置し、底を摺鉢状に掘って安定させ、口造りの両側に杭を打って約四十五度角に固定してあったと思われるが、その杭は今も朽ちている。この配置の方法は全国に舞台では篠山だけで、他の舞台のものも真上に向いている。さらに口縁部まで埋めてあるもの、胴の真中あたりまでのものと、大小も含めてさまざまである。さらに興味があるのは、所によって大甕の生産地が異なることである。

西本願寺の甕は信楽焼、金沢で見るときは四国の大谷焼、岡山は当然、備前焼である。

しかし、この「縁の下の力持ち」として演能に大きな役割を果たしてきたであろう大甕の存在も、識者の間でたまに語られることがあっても、何処の舞台の下には何の時代の何窯の大甕ということを調査した人はいないのではないか。舞台建立の年代と大甕を焼成した窯とその年代などがわかると、建築史的にも、芸能史的にも意味のあることではなからうか。

ちなみに篠山の大甕はもちろん丹波焼で、建立時に特に焼かせたもので「立杭釜屋村源助作」と記されている。

特集

学術情報の発信

自らの研究成果を世に問いたいという研究者が増える一方で、出版社がこの期待に応えられていないのもまた事実です。

「優れた学術書を世に出したい」という志をもちながらも、「採算が合わない」という現実の前に、大学出版部は苦悩してきました。その打開策として、助成金の交付を受けた上での出版という方法があります。読者層が限定され、発行部数も少ない学術書が生き残っていくための手段の一つといえるでしょう。

また、出版事情が厳しいといわれるなか、インターネットによる情報発信が研究者にとってきわめて有効なものとなっています。学術情報を多くの人が活用することのみを目的とするならば、何も紙媒体の本でなくてもよい、ともいえます。しかし、本を出版するということには、それだけにとどまらない意味があります。

いま、学術情報を発信する研究者と出版社、そのための媒体（本とインターネット）に変化の兆しが訪れつつあります。この両者間にある大きな隔たりを埋める議論は、これからも活発にしていかなければならない問題です。

学術情報とオンライン・ジャーナル 研究者の立場から

潮木守一

(武蔵野女子大学現代社会学部)

情報発信の移り変わり

これまで研究成果の発表には、ずいぶん苦勞をしてきた。とくに若い頃はどの出版社に原稿を持ち込んでも活字にはしてくれなかった。これは私一人だけの経験ではなかった。先輩、同僚、後輩の優れた原稿が、いつまでも埃をかぶっている光景を、数知れず目撃してきた。こういう苦い体験をしてきた世代からすれば、インターネットの出現は、まさに天啓のように鳴り響いた。これによって出版商業主義から独立できる。いちいち出版社に頭を下げまくることなく、思い通りに研究成果を発表できる。この天の恵みを利用しなくて、何を利用しろというのか。

さっそく大学院の授業では、院生にホームページの作り方を教えた。「これからは我々にとって新しい時代が始まるのだ。ホームページの書き方さえ知っていれば、怖いものはない。これからの研究者は出版業界から独立して、ホームページ上で研究成果の交流をすればよい時代になる」。

名古屋大学にいた頃、名古屋大学出版会の経営を手伝わされた。その当時の名古屋大学出版会は絶対好調にあり、毎年次々と有力な賞を獲得しては、周囲を驚かせていた。営業的にも堅調で、教科書のストックがたまるたびに、収入が確実に上向いていた。ただ、大学出版会とはいえ、あくまでも独立採算を維持しなければならぬ。危険な出版はできない。とくに販売部数の限られた学術出版の場合、価格の設定が頭の痛い問題だった。あまり高く設定すると売れない。しかし、売れる見とおしの少ない研究書は、やむをえずある程度高い値段をつけてコストを吸収するほかない。若い頃、引き受け手のない原稿を抱えて、出版社めぐりをした時の経験がよみがえってきた。

考えてみれば、学術情報を出版業界を通じて「商品」に転換し、その「商品」を流通業界を通じて伝播させる必要はどこにもない。もともと学術情報は研究者仲間の中だけで必要とされ、その内部だけで利用される情報である。そ

の流通範囲はあくまでも限られている。ただ、これまで従来型の出版システム、流通システム以外に頼るべき手段がなかったから、学術出版もまた小説家の文学と同じシステムを利用してきただけである。

すでにコンピュータの普及しはじめたアメリカでは、一九八〇年代から博士論文はデータベース化され、注文を出しさえすれば、そこから打ち出して、購入できる仕組みとなっていた。ワープロの出現を受けて、筆者もまた「研究者よ、ワープロを使って出版業界からの独立を獲得しようではないか」と呼びかけたことがある。しかしインターネットのインフラが整っていなかったその当時は、それほどの影響はなかった。その後、インフラが整備され、我々でも利用できるようになった一九九〇年代の中葉、再び同じ研究者仲間に向けて、今度こそとばかり、呼びかけてみた。それが「オンライン・ジャーナルの可能性と課題」というタイトルの、文字通りオンライン上でだけ発表した最初の論文である。

このオンライン論文を発表してから、すでに六年の歳月が経とうとしているが、その後、いったい何が起きたであろうか。これまでの経験を振り返ってみよう。

オンライン・ジャーナルへの夢

まず最初に、現在の正直な気持ちを語れば、もっと多くの人々が同調し、オンライン・ジャーナルを利用してくれ

ると思っていた。つまり過去六年間の推移は小生からすれば残念であり、不満でならない。いったいなぜみんな「私設出版社」を利用して研究成果を発表しないのか。頭を冷やして考えてみれば、そこにはいくつかの理由がある。

まず第一の理由は、まだなんといっても「同志の友」が少なすぎる。オンライン・ジャーナルの強味は、引用相手がデジタル化されていれば、クリック一つで瞬時にその論文に飛べることである。従来のように、いちいち注をつける方式では、わざわざ図書館まででかけ、無尽蔵な蔵書のなかから目指す文献を見つけ出さない限り、参照することができない。将来、すべての学術論文がデジタル化されれば、引用されている論文をクリック一つで原文を引き出すことができ、図書館にいちいち出向く必要がなくなる。これは我々研究者にとっては、夢の世界ではないか。

さらに小生の属する専門分野では、毎年多くの研究者が自分で調査票を作成し、自分でサンプルを抽出して、実態調査を行っている。このタイプの研究では、まずその研究者の使用した調査票が公表されることはほとんどない。また学会のレフリー・ジャーナルにはそれを収録する物理的スペース、予算上の余裕がない。一つ一つの質問項目に、一人一人の調査対象者がどう答えたのか、そのデータが公表されることはほとんどない。その理由は簡単で、そのデータを紙の上で印刷物として公表しようとしたら、膨大なページが必要となり、物理的にも予算的にも不可能だから

である。その結果、どういうことが起きるかというところ、研究に使った元のデータを握っているのは、当の研究者だけで、それ以外の者はそれにアクセスすることができない。部外者は当の研究者の結論を、「ああ、そうでしたか」と黙って聞いているしかない。

しかし考えてみればこうした研究スタイルは可笑しいもので、第三者の追試・再試から免れている研究は研究に値しない。これでは知識の確定、確認、蓄積はありえない。しかしそうかといって、使用したすべてのデータを公表するととなると、莫大な資金が必要となる。そこでお互い様、やむをえずこうしてきているだけである。つまり、従来型のジャーナル、従来型の出版物に依存している限り、研究情報の公開は限定され、こうした不十分で不完全な研究情報の範囲内で研究交流を図るしかない。

ところが、インターネットの登場は、こうした環境を一変させた。インターネット上であれば、その研究に使用したデータはいくら大量であろうとも、すべて公開できる。公開しておけば、新しい仮説、新しい分析方法を思いついた研究者は、その研究者なりの立場で再吟味、再集計、再分析をすることができるといえる。こういう機構を作っておけば、より高度な実証分析を共通の舞台の上で展開できるはずである。しかし口先だけでこういっていても始まらないので、まず「隗より始めよ」の言葉に従い、院生諸君と協力して、ある国際機関の公表した統計をコンピュータに打ち込み、

分析したあとで、その時に使用したデータをすべてエクセル・ファイルにしてホームページ上に公表してみた。このデータは年次統計なので、「このデータ・ファイルはどなたでも御自由にお使い下さい。ただ御利用くださる時は、できれば新しい年度のデータを追加して下さい。またその次に使う人は、もう一年分のデータを追加して下さい」と書き添えておいた。我々が期待したことは、こうしておけば、毎年新たなデータが追加されてゆき、やがては膨大な時系列のデータ・ファイルが出来上がり、誰でも自由にそれを利用できるようになると思ったからである。

この企画を実行したのは、今から四年ほど前のことである。この我々の期待が果たして実現されたかどうかは、今は報告する段階にはない。ことあるごとに、データの共有化、共同利用が主張されるが、事態はそれほど簡単には動かないようだが、筆者はまだあきらめていない。

紙媒体への信仰

もう一つ、オンライン・ジャーナルが発展しない背景には、依然として印刷物に対する信仰が強いことがある。この信仰は二重の背景をもっており、まずせっかく「私設出版社」を手にいれたといっても、実際にホームページをのぞいてみると、あまり役に立つ情報が載っていない。このことが、オンライン・ジャーナルに対する信頼性を低めていることは明らかである。我々研究者はもともとと研究情報

の生産者であると同時に消費者でもある。一所懸命、ホームページをくくってみても、たいして役に立つ情報が載っていないと、あまりみたくなくなる。それに引き換え、名の通った出版社から刊行された本であれば、それだけのゲートキーパーの評価・検証を経てきたのだから、当たりはずれが少ない。

つまり万人が「私設出版社」をもち、自由に情報を発信できるようにしたのはよいことだが、このようにして発信される、無数に近い情報についての評価機構がまだできていないという問題である。だれしも無数に近い情報の一つ一つを読み下して、どれだけ価値があるか判定している時間はない。そのことを考えると、出版業界があつて、専門の編集者が吟味の末、出版に載せてくれる仕組みは便利である。また専門学会があつて、そのレフリーが内容をチェックして、価値ある情報だけを採択してくれる仕組みは、何にも代えがたい。ただそこには専門編集者といえども、専門研究者といえども、一〇〇%完全な選択ができるとは限らないという、宿命的な問題がつきまとうことになる。

この問題について、いろいろな立場の人の意見を聞いていると、これもさまざまである。なかには評価機構、レフリー制度など一切不要だと主張する人もいる。それとは逆にオンライン・ジャーナルを発展させるためには、研究情報のクオリティ・コントロールは絶対に必要で、クオリティ・コントロールのないジャーナルは結局のところ信頼

を失い、利用されなくなるという意見もある。

この問題については、小生自身まだ意を決しかねている。ただこういう新しい時代が到来したのだから、発想をまったく変えてみたらと思うことがある。つまり、レフリー制は廃止して、研究者はどんどん自分のホームページ上で研究成果を発表する。確かにレフリー制は研究情報のクオリティ・コントロール上必要で有効ではあるが、所詮は人間の研究を評価するのだから、一〇〇%の公平性は期しがたい。だから研究者には自由な発表の場を提供する。その代わり、重要な研究成果であれば、どんどん引用され、多くのリンクが張られ、そうでない研究成果は無視され、ファイルの下の方に置き去りにされるはずである。つまり情報の生産者は自由に発表し、消費者は自由に選択することによって、サイバー上に多数の参加者からなる評価機構が出来上がることになる。

市場に登場する商品は、すべてこうしたメカニズムで取捨選択されてゆくが、学術情報もこれと同様のメカニズムを使えるのではなからうか。これは一種の公開評価、衆人環視の中でレフリー制になるが、案外そのようななかから、何がしかの秩序が出来上がってゆくのではないかというのが、小生の希望であり、期待でもある。

果たして、この期待がどれほど現実のものになるか、もう数年経ったらもう一度検討してみようではないか。まだ希望は捨てるべきではない。

これからの学術情報流通におけるインターネットの役割

岡本真 (Academic Resource Guide 編集兼発行人)

「書物復権」

学術出版八社(岩波書店、東京大学出版会、みすず書房、未來社、法政大学出版局、白水社、紀伊國屋書店、勁草書房)による共同復刊事業「書物復権」が今年で五回目を迎える。体系的に集めた読者のリクエストを参考に復刊書籍を決めるといふこの試みがいかに画期的であるかはいまさら言うまでもないが前回と今回の「書物復権」の画期性はあえて指摘したい。なぜならインターネットに設けたウェブサイトで読者の復刊リクエストを募ったのだから。インターネットへの進出は復刊リクエストの募集という事務的広報の範囲を広げただけではない。印刷メディアからインターネットにシフトしつつある人々に「書物復権」というメッセージを伝えたのだ。特に昨年引き続き今年もインターネットでのリクエスト受付が行われたことで、このメッセージはより強固で信頼に値するものになった。そしてまた一部の学術出版がインターネットに本来の意味で

進出しつつあることを実感する。かくして、学術出版という形での学術情報の流通がインターネットでも進み出すきざしが見えてきた。

学術情報とインターネット

だがこれは従来、学術情報の流通の一部分、いや大部分を担ってきたとされる学術出版が、ようやくインターネットの世界に乗り出してきたと見るべきかも知れない。なぜなら、学術情報そのものは、そう思えるほど早くからインターネットで展開してきているからだ。学術情報とインターネットの関係は、短いインターネットの歴史のなかでは長い歴史を持つ。これはインターネットがその初期において学術情報のネットワークとして進化してきたからだ。一九九二年九月三〇日、「日本最初のホームページ」が文部省高能ルギー加速器研究機構計算科学センター(当時)の森田洋平氏によって生み出されたことは決して偶然ではない。

インターネットにおける学術情報の一つの形は国立情報学研究所(旧学術情報センター)^③や各分野の学協会^④、全国の大学図書館^⑤のサイトにみとれる。国立情報学研究所では全国の大学図書館の蔵書を一括して検索できる総合目録データベースWWW検索サービス(NACSIS Webcat)やオンラインジャーナルへのアクセスを提供する電子図書館サービス(NACSIS-ELIS)が公開されている。数ある学協会では、たとえば社会学文献情報データベース^⑧(日本社会学会)の構築や「独創的研究」をテーマにしたオンラインでの公開討論会^⑨(日本免疫学会ニュースレター編集委員会)が実施されている。各地の大学図書館では特別コレクションの電子化が進展している。そのさまは壮観の一語に尽きる。

研究者個人による発信

しかし、これらだけに目を奪われてはインターネットにおける学術情報の実像は見えてこない。研究機関や学協会、図書館といった学術情報の古典的な担い手の他に、ある意味最も古典的な担い手、つまり研究者自身による発信も進んでいる。手元の私的なデータベースに記録してあるだけでも、文科系だけで実に二〇〇〇人を超える研究者がウェブサイトを開設している。これは業績紹介にとどまるものやゼミ生による教員紹介といったものは除いた、実際に研究者が自身で作成し、管理しているもの数である。いづれも論文や書評、文献目録^⑩、データベース^⑪、年表等^⑫、な

んらかの学術資料を公開している。二〇〇〇人という数字をどのように評価するかは立場により様々だろう。だが、一つ確かなことは、いまこの時点で二〇〇〇人の研究者が学術情報をインターネットで“Publish”しているということだ。学術出版社の力を借りず、自分自身の手で……。

「二村一夫著作集」と「森岡正博全集」

この二〇〇〇サイトのなかから、これからの学術情報流通におけるインターネットの役割、ひいてはこれからの学術情報流通における学術出版の可能性を示唆していると思われる二つのサイト、「二村一夫著作集」^⑬と「森岡正博全集」^⑭を紹介したい。名称が示すように二村一夫氏(労働史)、森岡正博氏(生命学)の著作を公開するウェブサイトであり、いづれも本人の手で開設され、公開されている。それぞれ内容と構成を簡単に述べておこう。

「私がこれまでに書いてきた論文やエッセイを、なるべく多くの方に読んでいただきたい」という思いから始まった「二村一夫著作集」は現在は一巻に別巻三冊で構成され、「月報」と銘打った編集雑記が付されている。『大原社会問題研究所をめぐる人びと』『日本労働運動・労使関係史論』『日本労働運動史研究案内』等と題された各巻に二村氏がこれまで発表してきた論文が電子化され、再録されている。現在市販されている書籍は再録の対象になっていない。著作集の巻頭にある著者自身の言葉を借りれば、

「過去四十数年間に執筆してきた論文やエッセイを、自身で編集刊行するオンライン著作集の試み」であり、同時にそれだけではなく「本サイトでなければ読めない『高野房太郎とその時代』を書き下ろしで連載してい」る場でもある。旧作も新作も無料で公開されている。

もう一つの「森岡正博全集」は「だって、金を稼ぐことよりも、読者の手に届くことのほうが、私にとってはしあわせなんだから」という思いから絶版著書の全文公開を進めてきた森岡氏がごく最近発表したばかりのものだ。全一七巻構成で既に森岡氏のウェブサイトに「生命学ホームページ」で公開されていたものをPDFファイルの形式で収録していく方針が示されている。また「これから書くものすべてを、順次、全文掲載してゆ」くとの決意表明とともに、『EJ2000-2001』『謎の新村本』と仮に題された新作の公開が示唆されている。実験的に作品を販売していくとの姿勢も示されており、公開された作品は閲覧・印刷ともに無料のものから、印刷は有料、閲覧・印刷ともに有料の作品とバリエーション豊かになっている。

二つの著作集から

専門分野も世代もだいぶ違う二村氏と森岡氏だが、同じように既発表作品の電子化を進め、それにとどまらず新作の公開を試みているわけだ。これ以外にもこの二つの著作集の共通項には興味深いものがある。たとえば著者であり

編者でもある二人の研究者は既に極めて優れた業績を挙げていること、従って厳しいとされる現在の出版事情にあってもインターネット以外に発表の手段を持たないわけではないこと、その二人がオンラインで著作を公開していく動機として「読者」を挙げていること等々……。

ここで、あらためて考えたいのは彼らがなぜインターネットでの著作集の刊行に踏み切ったのかだ。既にみたようにその一つの答えは「読者」という言葉に示されている。自分の作品を滞りなく読者の手に届けること、そして作品を通して読者と出会うこと、これこそが二人の研究者が自身の著作集をインターネットで刊行した一つの、しかし大きな理由ではないだろうか。およそ情報は、その受け手を得て初めて意味を持つ。学術情報もその例外ではない。より多くの読者に自分の著作を届けるといふ、いわば情報の健全な流通の可能性をインターネットに見出しているのが両氏であり、その所産として「二村一夫著作集」「森岡正博全集」という新しい形の著作集があるのだろう。この見方が正しければ、二つの著作集はたとえば学術出版のような、これまで学術情報の流通の担い手とされてきたものへの痛烈なアンチテーゼだとも言えよう。

まとめにかえて

インターネットでの研究者自身による情報発信は、これ以外にも多種多様である。その理念一つをとっても、上述

のような読者との出会いの可能性だけではなく、公開が研究者のそもそもの使命であるとするもの、学術的な成果は個人ではなく社会に帰属させて広く共有していくべきだとするもの、あるいは流通の中間過程を排し、学術情報の対価をより直接的に読者に求めていこうとするもの等々……。発信の数だけ理念があるというのが真実だろう。

だが、一つ確かなことは、それぞれの理念を実現するための手段として、インターネットが着目され、実際に用いられていることだ。これを事実として直視し、事実として受け止め、事実として理解する必要がある。そして、その上でインターネットが負っている役割、インターネットに見出せる機能がインターネットに固有のものであるのか、あるいは書籍等の他のメディアと交換可能なものであるのかを見極めるべきなのだろう。このプロセスのなかにこそ、これからの学術情報流通におけるインターネットの役割、そしてこれからの学術情報流通における学術出版の可能性が見出せるのかも知れないのだ。

注

- (1) 書物復権
<http://www.kinokuniya.co.jp/fukken.html>
- (2) 日本最初のホームページ
<http://www.ibarakiken.gr.jp/www/>
- (3) 国立情報学研究所
<http://www.nii.ac.jp/index-j.html>

- (4) 学協会情報発信サークル(Academic Society Home Village)
<http://www.soc.nii.ac.jp/>
- (5) Yahoo! JAPANの大学図書館カテゴリー
<http://dir.yahoo.co.jp/Reference/Libraries/University-Libraries/>
- (6) 総合目録データベースWW検索サークル(NACSIS Webcat)
<http://webcat.nii.ac.jp/>
- (7) 電子図書館サークル(NACSIS-ELS)
<http://els.nii.ac.jp/>
- (8) 社会学文献情報データベース
<http://www.soc.nii.ac.jp/jss/database.html>
- (9) ネットによる公開討論会/独創的研究ユース、
<http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/molonc/www/immune/Originality.html>
- (10) Yahoo! JAPANの特別コンテンツ検索コーナー
<http://dir.yahoo.co.jp/Reference/Libraries/SpecialCollections/>
- (11) 生成する目録
<http://www.ne.jp/asahi/coffee/house/BIBLIO/>
- (12) ネットニュース集成
<http://www.ne.jp/asahi/coffee/house/DB/>
- (13) 年表・年譜一覧
<http://www.ne.jp/asahi/coffee/house/TIMELINE/>
- (14) 一村一夫著作集
<http://oohara.nt.tama.hosei.ac.jp/nk/>
- (15) 森岡正博全集
<http://www.kinokopress.com/mm/>
- (16) 一村一夫「刊行の辞」(一九九八年九月二五日)
<http://oohara.nt.tama.hosei.ac.jp/nk/old/indexseconded.htm>
- (17) 森岡正博「著書のインターネット全文公開は暴挙か。」
 ("Academic Resource Guide" 64 二〇〇〇年五月二五日)
<http://www.ne.jp/asahi/coffee/house/ARGL/compass-033.html>
- (18) 生命学カーニバル
<http://member.nifty.ne.jp/lifestudies/>
- (19) 森岡正博「森岡正博からの挨拶」(kinokopress.com所収)
<http://www.kinokopress.com/mm/goaisatsu.htm>

「助成出版のすゝめ」序説

堀井健司

(慶應義塾大学出版会)

研究成果の公刊と大学出版部

学問とは「人間が関わる世界の様々な現象を言語によって説明し理論化しようとするもの」といえる。そして学問研究によって生み出された成果は、人類の知的共有財産の一部を構成していく。こうして研究成果は、「言語」を媒介して、人類の知的共有財産の生産・普及・発展に寄与する。俗に“publish or perish”といわれる所以である。

他方、大学出版部の事業において、学術研究成果の出版は、重要な基本的使命の一つである。それは、「学問研究」を重要な使命としている大学の理念および機能と大学出版部が深く関わっているためである。

大学出版部の苦悩

かつてアメリカのエール大学出版部長のノーマン・V・ドナルドソン氏は、「大学出版部はその仕事の性格からして、利益をあげることが期待できないし、援助なしにはそ

の費用をすべてまかなうことすら期待できない、と考えられる」と述べている。

なるほど、現実には、学術書は読者対象が狭く、また普及・販売に時間がかかる。在庫に対する管理費や税金は、出版経営を圧迫する。さらに、一九九〇年代半ばからの日本の不況は、大学出版部にも深刻な打撃を与え、これまで以上に厳しい経営環境に立たされているといえる。

こうした中で、内容的に優れた研究成果でありながら、採算面の見通しが立たないために、刊行を断念せざるを得ないという事態が恒常化すれば、大学出版部は本来の事業に大きな支障を来たさざるを得ないことになる。

活動の根幹にかかわるこの問題に対して、アメリカの大学出版部では、自己資金の形成に努めるとともに、公私にわたる出版助成金・寄付金を積極的に導入することによって、問題解決を図ってきた。実際、営業損益の実に八割以上の金額の援助（大学の援助と助成金）を得ることで、経

常赤字を最小限に抑える努力をしている。

日本においては、大学からの援助額以上の助成金を、外部から積極的に得ることによって、經常赤字を抑える努力をしている。その端的な例が、「出版助成」である。

以下、書籍を通しての研究成果の公表のケース、特に出版助成を受けての出版について、若干の考察を試みる。

出版助成を受ける姿勢

出版助成の意義は、何よりもまず経済的な助成である。それを受けるためには、「出版助成」の必要条件と、それと対峙する姿勢が整っていることが重要である。ここでは、出版助成を受ける姿勢について、いくつかのポイントに絞って、各々掲げていく。

(1) 助成出版を企図するに際しての条件について、以下が挙げられる。

まず、原稿が出来上がっていること、である。これなしでは、すべてが机上の空論となる。

そして、優れた内容であること、である。内容が弱くて売行部数が望めないために助成出版を受けるものが皆無ではないが、そのような本に対して読者は敏感である。

さらに、指定の期限内に刊行可能であること、である。これがおぼつかない企画は、そもそも助成出版の検討の組上にのせるべきではない。

(2) 出版助成を受ける前提となる意識について、以下の

二点を挙げる。

第一に、出版助成を得ての出版は例外でない、ということである。東京大学出版会の竹中英俊氏は、助成出版の実態について六つの類型化を試みた上で、「出版助成制度の積極的な利用は出版社の主體的な活動の一部である」と指摘している。さらに、刊行された本は、読者にとって、それが出版助成を受けたものかどうかは関係がない、そして一般企画による出版よりも、対象分野に対する「知識」、内容の価値を見抜く「見識」、部数・コスト計算・定価等を見込む「算式」能力を必要とする、としている。

第二に、市場に出ない（流通ルートを経ない）ものは、狭義の意味で「出版助成」ではない、ということである。定価をつけずに助成団体へ納める、または刊行後の助成団体への納品部数が多い例が、まま見られる。この場合、法政大学出版局の平川俊彦氏の指摘のとおり、たとえば、書籍の形となっても、仲間内にもみ配付され、すなわち、広く読者の目に触れず、研究成果を世に問うことができないうのは、出版本来の使命を果たしていないといえる。つまり、「出版助成」とは市販される書籍への助成を指すのである。

(3) 前項を受けて、出版助成を得ての出版の気構えについて、以下の二点を挙げる。

第一に、助成団体は出版助成を行なうこと自体が事業の一環である、ということである。特に、公益財団や私立大学による出版助成では、助成団体の専門分野への助成がほ

とんどである。言うまでもないことだが、助成を受ける著者・出版社はその点を十分に理解した上で、「助成団体と共に書物をつくる」意識をしっかりともたなければならぬ。

第二に、たとえ助成決定された出版企画であっても、それを刊行する過程と刊行後の活動において、気を抜くことは許されない、ということである。刊行期限内に出版を全うすることは、助成を受ける者の義務である。刊行後、各種出版賞等の受賞に与ることは、著者・出版社の名誉であることはもとより、助成団体の名誉である。刊行後のフォローも十分に行ない、互いの関係を良いものとする。

(4) 最後に、出版助成を得て出版する書物が経る、三つの「審査と評価」について、一言しておく。

第一段階のレフェリー審査は、専門的見地から厳密に行なわれることにより、それ自身が大学の自己評価機能の一部をなす。第二段階の、出版社における内部的な企画検討の過程では、出版の可能性と現実性についての独自の判断が下される。

この二つの「審査と評価」の過程を経て、世に送られた書物は、そこで不特定多数の専門的・非専門的読者、そして歴史の審判という第三のもっとも苛酷で厳密な「審査」を受けることになる。その過程を経て、はじめてこの書物が、著作者の研究活動にフィードバックされるとともに、社会的・公的な財産となるのである。

おわりに

大学出版部協会では、「刊行助成部会」を設け、学術書の出版助成に関する調査・研究を行なっている。同部会は一九九九年より小委員会制度を充実させ、各種出版助成制度について、幅広く、深く把握し、同制度の普及に努める組織が整った。これまでの活動の経験を踏まえて、このほど、助成出版の理念や概要、事務手続き等をまとめた小冊子『助成出版のすすめ 二〇〇一年版』を発行した。紙幅の関係で本稿では触れることのできなかった、助成出版の実務については、この冊子あるいは協会ウェブサイト (<http://www.ajup-net.com/>) を参照いただきたい。

いまだ不況に喘ぐ昨今、助成団体の事業縮小、事業休止の話を目にする。助成団体は自身の事業を厳しく見直し、制度の再編成を行なっている。当然に、助成金額の増大はおぼつかない。

こうした厳しい環境にある今、出版社は、出版助成本来の趣旨を十分に理解し、出版助成制度の重要性を改めて認識した上で、これを大いに活用して資金的な援助を得て、優れた学術書の刊行に邁進しなければならない。

〔付記〕 本稿は「第四回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー」（二〇〇〇年八月二五日）における筆者の分科会発表「日本における学術書の刊行助成制度―大学出版部の立場から―」の総論部分をもとに、文中で触れた『助成出版のすすめ』などを参考にしながら、大幅に加筆したものである。

待たれる全国「名書」鑑評会

斎藤和明

(明星学苑理事長)

時折り、書架から被せ紙が緑色のFOUR QUARTERS
By T. S. ELIOTを取り出している。詩人エリオット自
身が取締役を務めたこともあるフェバランフェイバー社出
版、四つの詩から成る詩集『四つの四重奏』(一九四三)
である。私の手にあるのは、学生時代に買った一九五五年
印刷の第一〇刷。そのジャケットをはずすと、淡い黄土色
のクロス装。それが横一四三ミリ、天地二二三ミリ。まづ
擦る。快感のある表紙である。本を開く。それぞれの頁
が味わい深い。一葉が二三九ミリ×二一九ミリの大きさ。
四重奏が四曲だから、四四頁。めくるのが大袈裟に言う
と快揚快愉、つまり趣よし気味よしのクリーム色の紙、それ
がやや厚めで、活字がいい。それにその感触のよさは、眼
にとびこんでくる言葉がこころを捉まえること離さないこ
とで、いっそう深まる。いま開けた頁が、「イースト・コ
ウカー」だった。こう始まる。"In my beginning is my
end."「私の初めのなかに私の終わりがある。」

これは、虹を見つうたうワーズワスの、"The Child is
Father of the man"(子どもは大人の父である)の、成
人になっての性格や人格の基本、つまり感受性が幼年期に
出来上がっているものだ、という連続性の線を気づかせる
詩句とは違う。エリオットの詩では点。人生の出発点にす
でに終点が隠されて存在しているのだという。同じ詩人の
「彼の誕生は死である」と記す一行に通ずる。子どもこの
ろの無邪気なよろこび、あるいは苦痛が、人生の終点に戻
ってくるのか。ものごころついたころの私の人生の初めは、
戦争中だった、惨めだった。この人生、出発点同様、晩年
になって、別な戦争、さまざまな対立や争いに巻き込まれ
ながらの終わりになりそうだ。

しかし顧みると、初めと終わりの間の人生で、私は本と
の出会いには恵まれていた。これこそがいま最も必要とし
ていた本だ、よい本に出会ったと思わされることになる本
が、この一生のそれぞれの「いま」に与えられてきた。本

が与えられたその時、魂が深いところで、喘いでいた。その出会いの恵みのため、私は生きる苦しさ悩みからさまざまな意味で救われてきた。だがそれは、突然で偶然で、一方的で、しかし、苦しい時の救いになるための与えられ方であるような出会いだった。

本に救われてきたのは、幼少より本が好きだったから得知らぬ高さより与えられた恵みゆえなのだろう。好きになつて撫でてしまつている本にはことばでの表現を拒む独特の味わいがあるものである。先日、明星大学の理事長室のある学苑本部の近くの、明るさあたたかさの漂う府中市美術館で、「ウィーン—生活と芸術」展を享受堪能したが、二〇世紀初頭の既成様式からの分離決別の芸術運動ゼツェーションに焦点が置かれていて、そこへのウィリアム・モリスからの影響、モリスとともに分離派が恩地孝四郎の版画や装幀へ与えた影響なども見えてきて、私にとつて特に興味深かった。私は、中学生のころから「本は文明の旗」であると考えていたこの版画家の装幀本を好きになつていたのである。そのため古本屋めぐり狂になつていたのである。いまは単調な紙表紙の時代で、しかも指が嫌うヴィニール表紙も出てきている。不快な臭気が鼻にも付着してしまふヴィニール装は、さすがに少なくなつたが、しかし、たとえヴィニールだろうが紙の表紙であるうが、造り手のほうでは読み手が手にして快い表紙、字体、装幀、製本、そんな本造りをつねに目差し心掛けてもらいたい。ケルズ

書級の書物、並でない愛書家の寿岳文章や庄司淺水氏の著書のあれこれで言及されるケルムズコット版本の級、嵯峨本級の書物を目差す、主題と文章と造本が三位一体となつた馥郁とした馨りと味のある快い書物がずらりと書店に並ぶ、そんな時のくるのが待たれる。これは名大吟醸だと思ふと大概、全国新酒鑑評会金賞受賞作だったということがあるが、ただ金をかけた豪華本ではなく、中身に相応しいそれぞれが特製の芸術作品である書籍に出会いたい。そのためにも図書館協会推薦とは違ふ、個性ある名造本と名翰藻を競う全国「名書」鑑評会の誕生が待たれる。装釘展は何十年も前からあるようであるが、名著百選はしばしば眼にするが、待たれるのは「名書」百選で、名所図会ずえのような「名書」案内があると楽しい。清酒の全国品評会は明治一〇（一八七七）年が第一回だが、銘酒百選のように、「名書」のアカデミー賞最優秀作品が選ばれるようになると思ふ。町の図書館でも、歴代のその最優秀作品はいつでも手にできるといい。そして手にするのが快い、自分の「名書」を、それぞれ身近に置きたいもの。以前、数日借りて惚れ込んだ庄司氏の『日本の書物』の限定版総革特別装本、ティニ女史の装幀の、もしばしば触つていたい一冊である。

味のある本が少なくなつた。だが、手に取つて快い本がないわけではなくて、例えばクロス装のデスク版『岩波国語辞典』の第五版そして第六版は、使つていて感触がよい。オックスフォード・ブルーもよい（そう思うのは好みの問題

だが、『広辞苑』のケインブリッジ・ブルーよりもいい)。

いま全盛期のペーパーバックは紙だけの表紙だが、ハードカヴァも布表装ではなくほとんどボール紙の上に紙を重ねた表装である。前者はソフトカヴァとも呼ばれ、缺みで切るのは容易。それはいま始まったことではなくて、フランス装の仮製本のままの紙表紙は味わい深く、戦時の貧しい時期の室生犀星『詩集いにしへ』(昭和十八年、一條書房、二円二〇銭)、戦後さらに貧しい時代の袖珍本川路柳虹『詩を想ふ』(草原書房、四五円)も愛着を感じさせる紙表紙。また、『世界詩人叢書』(蒼樹社、一五〇円)が、和紙のすばらしい叢書だった。手許にあるその叢書中の『ノヴァーリス詩集』は、二三年発行、これも一五〇円である。犀星のも柳虹のもノヴァーリスのも同じような枚数の本だが、犀星に比べて、四年後昭和二年の柳虹の本も和紙の『世界詩人叢書』の三分の一の定価ながらやはり高価なのは、昭和二年に政府がインフレ対策のため旧円を封鎖して新紙幣を発行したあとの値段なので、インフレがますますつづいていたことの一例となる。

ハードカヴァのボール紙は、「カーアッポア」と聞こえる英語なのだが、「カードボール」(cardboard「紙の板」)で、「カード」は紙の意味、「ボール」は板。だから、「紙板」と呼ばれることから、紙でも板なので、紙よりも板の特徴に近いものだ。かつて日本人はそう思ったのだとわかる。缺で容易く切れない、ボール紙の厚い表紙で味のある

本は少ない。吉田健一の『書架記』(一九七三年、中央公論社)は表紙の背と隅が革の紙板で、これは恩地孝四郎の記す、「著書、出版者、装幀者、工務者のクワルテット」(『愛書雑談』、『装本の使命』、一九九二年、阿部出版)の氣息の合った、「滋味」のある書物の見本であった。これは折久美子さんの「装釘」。みごとな出来映えである。

子ども時代に興奮して読んだ「立川文庫」の霧隠才蔵や猿飛佐助は、兄貴のいる同級生の貸してくれた本だった。夜ベッドに持って行っていっしょに寝たいと思うのは、いまは鬼平や秋山大先生若先生、梅安だが、あのころは塚原ト伝や加藤清正の物語、のちに文庫版の『モンテ・クリスト伯』の長さにびっくりすることになる小学生用の「巖窟王」、そして「紅はこべ」「三銃士」や孫悟空の出る「西遊記」それに「三国志」に夢中になっていた。さらに友だちの家で読んでしまった『ああ玉杯に花うけて』や『夾竹桃の花咲けば』なども懐かしい。あまりの懐かしさゆえに、元々の版でまた出会ってみたいと思い、それらの復刻版が出たとき早速求めてしまったが、なにか白けたものを感じていた。それに、あれは、友だちの部屋にもぐり込んで読んでから面白いものだったのかも知れない。

子ども時代の読書のように、本の感触の背景には、その本との初めての出会いの周りにあった情景の思い出がある。それが読書の周辺にあって、人それぞれの本の思い出の中には読書をしてきたときの風景や風の動きなど、周辺のこ

とが大切になる。あのころ、本に触れることがうれしかった。そのころの愛読書は大人版の荒木又右衛門やら直木三十五集のはいった「大衆文学全集」を除いて、ほとんどボール紙表紙の本だったが、感触と匂いは、思い出せる。

それにしても、いま紙の装幀で、いつも触れていたい素晴らしい本の出現が待たれている。それほど、魅力のない紙の表紙が多い。例えば、昭和五二年に古川書房から編者大山澄太の『山頭火遺稿三八九集』が発行されたが、これこそ好個の書冊なり、であった。それは、昭和六年二月と三月に「第壹集」から「第三集」を、そして翌年十二月に「復活第四集」、八年一月と二月に「第五集」「第六集」を出して、その奥付の脇には次号第七集のための原稿締切り三月二十五日とあるので、心ならずもであったろうが、その「第六集」で跡絶えた種田山頭火のガリ版刷り、五十部発行の雑誌『三八九』の復刻合本版である。箱が臙脂色で、表紙はボール紙に藍の和紙をかぶせたもの、薄黄緑の見返しも和紙、扉は赤判に山頭火の筆跡の白抜きで、いわゆる美本。そこには、「春が来た窓をあけろ」「朝はよいかな落ちた葉も落ちぬ葉も」「重荷おもくて唄うたう」「ひとすぢに水のながれてをる」などなど、山頭火らしい句、さらに山頭火の仲間のらしい句が充満しておる。とにかく味がある。そういう味のある紙造本が、これからも生まれるのを、私はいま、気長に待っている。

ほかにも待つものは数々あるが、それぞれの人の願望、

待っているものは夥しい。国土の環境改善があり、またもな政治家の出現、行政や財政改革、景気回復、医療政策の改革も待たれる。病院の、警察の体質改善、学級崩壊克服また世界から学生を惹きつけるための大学・大学院改革の課題がある。そして緊急なその課題のために、教育機関に従事する教員職員の意識改革が待たれている。それらには、もう一刻も待てないと思わせる危機意識がある。

数年前、英国の北部、西ヨークシャのリーズ大学で、私は一年を過ごしたが、リーズは、中世の都ヨークの近くでよい所だった。訪問客のある度に、近くの『嵐が丘』『ジーン・エア』などの背景となっているハワースへしばしば行くことができた。作品の雰囲気がいかに大事であるかと感じさせる風景の中に立った。リーズはシャーロットやエミリ、アン・ブロンテそれに兄弟のブランウエルの子まれた家のあるソントン近くの都市である。ブロンテ姉妹が学んだ「牧師の娘のための寄宿学校」のあるカウワン・ブリッジなども遠くなくて、ヨークシャー・モア（原野）が郊外に車でちょっと走ると、もうすでに始まるという、美しい自然がそばにひかえているという都市、それがリーズであった。振り返ってみて、そこで感じたことの最も大きなことが、その人々が何かをじっと待つ、ひたすら待っているということだった。

実際、英国人はよく待つ。そしてアイルランドでも、ウェールズやスコットランドでも、つまり連合王国人に共通

する、その待つという行為を見て海外からの旅行者は驚く。郵便局、銀行、切符売り場や劇場入り口や店の前、実によく並ぶ。実にいらだたずに並んで待つ。評判のフィッシュンチップス店に長い列があるとき、待つ人びとは、その顔付きに内心のいらだちを浮かべずに、あたかも日本人の私達が彼らの平然とした面持ちに感心するのを見越しているかのように、悠然とした待ち方をしている。吉祥寺などでも、菓子店や、メンチカツを買うために肉屋の前に長い列ができるが、英国人はとにかくよく待つ。パブでビールを注文するために、よく待つ。

パブで思い出すが、イングランドやアイルランドのパブで飲んだビア、ビターやスタウトはすばらしい味だった。しかし、一杯のビアがこの上なく美味であるためには、充分に待って渴いて、ビアを飲む時のくるのを、待ちに待っていないければならない。喜びの時を求めて、その味わうために最もふさわしい「時を待つ」必要がある。

すべてのものにそのものにふさわしい時がある。T・S・エリオットの『四つの四重奏』の「イースト・コウカー」にこういう一節があった。

I said to my soul, be still, and wait without hope

For hope would be hope for the wrong thing; wait
without love

For love would be love of the wrong thing; there is

yet faith

But the faith and the love and the hope are all in
the waiting.

Wait without thought, for you are not ready for
thought:

So the darkness shall be the light, and the stillness
the dancing.

(私は、自分の魂に向かって言った、静かに、希望を抱かずに待て／なぜなら希望は誤ったものへの希望かも知れない。待て愛を抱かずに／なぜなら愛は誤ったものへの愛かも知れない／だが、それでも信仰がある／しかし、信仰も、愛も、希望もすべてが待つということのなかにある／待て、考えることなしに、なぜならきみは、考えだすには、まだ早すぎるのだから／そうすれば、闇を光にさせ、静けさを踊りにすることになろう。)

考えることなしに待つとは、期待、希望への思惑なしに、ただひた待つことであろう。信仰の喜びを、愛の喜びを与えられるため、喜びの希望を抱くためにも、ただ待たなければならぬ。そのひたすらさが重要である。待つことなしには、大きな喜びは味わうことができないからである。待つことにより闇の中に光が輝く。停滞した、動かずにいる社会を踊りださせるであろう。私もまた待っている。全国「名書」鑑評会の誕生を、ただひたすら。

生物の種類

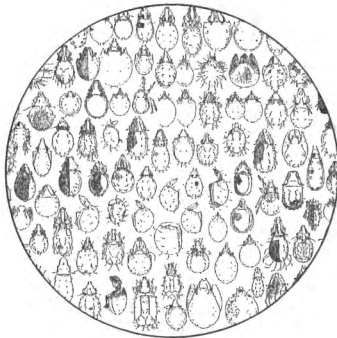
青木淳一

ちょっと犬の好きな人ならば、犬の種類をあげなさいといわれたら、シェパード、コリー、ビーグル、ボクサー、プードル、チワワ、ダックスフント、ラブラドルレトリバー、マルチーズ、ポメラニアン、チャウチャウ、秋田犬、土佐犬などスラスラと出てくるだろう。世界中の犬種は数百種あるといわれ、アメリカン・ケネル・クラブが公認しているものに限っても百二十一種あるという。林檎だつて、紅玉、国光、富士、ゴールデンデリシヤス、インドリンゴなどいろいろある。しかし、これらはみな品種であつて、生物学上の「種」ではない。犬はすべてひくくめてイヌという一つの種、林檎もすべてリンゴという一つの種に属する。人間もいろいろな人種が世界中にいるが、やはりヒトという一種の生物にすぎない。

このように、生物学上の厳密な種に限定したとしても、その数は一般の人たちが想像しているよりも、はるかに多いものである。たとえば、日本にはコウモリが四一種、ゴキブリが六一種、ムカデが一三〇種、テントウムシが一六四種いるというのと、だれでもびっくりする。一般に知られているのは、そのグループの中で大型の種、美しい種、役に立つ種、有害な種など、ほんの一部の種に限られている。

「この地球上に何種類の生物がいるか？」これはたいへんに難しい質問である。多くの書物に書かれている数字によると、動植物全部合わせて一四〇万種といわれている。これはもちろん、名前がつけられている生物の種数である。まだ名前のついていない生物がどのくらいあるか、これが大問題である。

日本の動物のうち、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類についていえば、ほぼ完全に命名済みであり、その全種類が図鑑などに掲載されている。しかし、もっと下等な動物になると、事情はまったく違ってくる。たとえば、私が専門に研究している土壌中に生息するササラダニ類では、一九五八年に私が研究をはじめ



土の中に棲むササラダニのいろいろ。
日本から660種が見つかった。

た頃には日本で七種しか知られていなかった。それが四三年後の現在、六六〇種に達した。そのうちの三八〇種が新種であり、命名する必要があるためである。つまり、私が研究を開始する以前、日本のササラダニ類についていえば、名前がつけられている種の割合は全体の一・〇六パーセントにすぎなかったことになる。このようにして、分類学的に未開拓な動物群の研究がつつぎと進み、命名作業が行われていくと、どうなっていくだろうか。

たとえば、京都大学の白山義久教授によれば、ダニよりもっと研究が進んでいない海底の泥の中にすむ線虫すべてに名前をつけられれば、地球上の生物は二億種を越えるだろうと推測する。現在一四〇万種だとすれば、それは実際に生息する種の〇・七パーセントにすぎないことになる。つまり、地球上の全生物のうち、名前がつけられているのは一パーセントにも満たないということである。

こう考えてくると、生物学者の非力を嘆きたくなるとともに、いくら頑張っても名づけ作業をやっても切りがなと思うと同時に、地球上にはなんでこんなにも多くの生物がいるのだろうか、なぜそんなに多くの種がいる必要があるのだろうかという疑問すら出てくる。

最近、急にその重要性が認められはじめた「生物多様性」についても、正直なところ、その意味がわかったようで、わからない。それに対して、「生物多様性とは、人間をも含めた地球上のあらゆる生物の生命維持装置である」というのが説得力のある説明とされている。

つまり、地球上にこれほどまでに多くの種の生物がいることは、神様の悪戯でもなく、地球の無駄でもなく、きわめて大切な重要なことだと理解しなければならぬ。

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

東北大学附属図書館とその付近



東北大学川内キャンパスの丁度真ん中に、附属図書館の本館がある。二階建てのコンクリート打ち放しの建物である。昭和四八年に建てられたが、この辺りは地下水が流れていて、建築途中で建物が浮いてしまい、工事をやり直したと聞いている。以前はマムシを見ることができたが、最近はいなくなってしまった。図書館の右手には昔からの雑木林が残っているが、自然が次第に少なくなっているのは寂しい気がする。

図書館正門の真正面には、阿部次郎の「三太郎の日記」に因んで、三太郎の小径という遊歩道（哲学の道）が作られており、その前には民法の中川善之助教授を偲んで椿を中心とした中善並木が植えられている。この辺りは、大学の記念講堂があり、その前に公園があって、市民が犬を散歩させていたり、応援団や運動部の連中が練習をしていたりする。川内キャンパスは、市民に開かれた大学を指して、キャンパスを囲う塀や門を作らなかつた。最近、旧教養部のあつた北キャンパスには塀と門ができたが、図書館や文系学部のある南キャンパスには塀や門がない。大学は、回りの公園を大学のものと思い、市民は市のもものと思っている。（正確にはちゃんとした区分があるらしいが。）

さて、東北大学図書館には数多くのコレクションがある。夏目漱石のコレクション（漱石文庫）や中国史記の原本など貴重な文献が沢山あり、時折一般に公開され大変好評である。漱石が細かく出納を記録したノートも大事に保管されている。インターネットでも岡本一平が書いた漱石と猫の絵画や他の貴重な資料の写真を見ることが出来る。

図書館に入ると、広いエントランスホールに、常時催し物の展示がなされている。もちろん学外者も図書館を利用することができるので、いつでも催し物を見ることが出来る。その脇に、東北大学出版会の出版物が大きなガラスケースの中に展示されている。ケースばかり大きく、まだまだ出版会の出版物が少ない感じ

東北大学附属図書館本館

〒980-8576 仙台市青葉区川内

TEL 022-217-5943

仙台駅前バスプール9番から青葉台、工学部、
宮教大行きに乗車、扇坂停留所下車徒歩3分
(URL) : <http://www.library.tohoku.ac.jp>



が否めないが、その内に一杯になり出版会の存在を皆に知ってもらう日を楽しみにしている。

多くのコレクションの中で、特殊文庫と名付けられた個人の蔵書を一括して保管しているものが多数ある。その中で、阿部文庫と狩野文庫について紹介したい。阿部文庫は、東北帝国大学法文学部教授であった阿部次郎の旧蔵書を集めたものである。美学や倫理学で理想主義、人格主義を提唱し、前述の三太郎の日記は旧姓高等学校生の間で盛んに読まれたという。私も、学生時代に読んだが、人生経験が未熟でなかなか理解できなかった。アリストファネスの話で、昔は背中でくっついていた男女が神の怒りにふれ、分断されてしまった、男女がお互いを求めるのは前世に分身であったから、という文章があった。なるほど、美学は経済学と違うなと感じてしまった。阿部次郎の三女の大平千枝子さんが「父阿部次郎愛と死」という名著を東北大学出版会から出されている。

狩野文庫は、旧制第一高等学校校長や京都帝国大学文科大学長を歴任した文学博士狩野亨吉（かのう こうきち）の旧蔵書で、約一〇八、〇〇〇冊からなる大コレクションになっている。図書館のホームページによると、「和漢書古典を主体とする幅広い領域の資料を含み、「古典の百科全書」あるいは「江戸学の宝庫」とも称される。史記 孝文本紀卷第十」（延久五年（一〇七三）写）および「類聚国史 第二十五」（平安時代末期写）の国宝二点は、この文庫に含まれていたものである。本学指定の貴重書も、その過半は狩野文庫本である。」

仙台の青葉は特に美しい。川内キャンパスの近くには、仙台市博物館や宮城県美術館があり、少し足を延ばすと仙台城址も近い。何かの折りに散策してみても如何だろうか。

（東北大学出版会 鴨池 治）

大学出版部ニュース

▼新幹事長に渡邊勲を選出

大学出版部協会の二〇〇一年度通常総会および部会・懇親会が、四月二〇日に東京ガーデンパレスにて開催された。

通常総会は、二一大学二四名が出席。

山下幹事長の開会挨拶の後、矢崎英明幹事（中央大学出版部）を議長に選出し、議事を進行した。二〇〇〇年度の各担当部門の活動ならびに決算を承認の後、二〇〇一年度の活動計画および予算案が審議され、全会一致で承認された。続いて行われた二〇〇一年度役員の変更では、九年余にわたり幹事長を務めた山下正の退任に伴い、渡邊勲（東京大学出版会）が新幹事長に選出された。副幹事長には、山本俊明（聖学院大学出版会）、市川昭



山下正前幹事長(右)と渡邊勲新幹事長(左)

夫（法政大学出版局）の両名、さらにその他の幹事ならびに監事が選出され、新年度の各担当が決められた。

通常総会終了後、同所において編集・営業・刊行助成の各部会、引き続き懇親会が開催され、二二校七五名が出席した。懇親会は、開会に先立ち当番校を代表して佐々井俊夫（明星大学出版部代表取締役）が挨拶、続いて山下前幹事長の退任の辞の後、渡邊新幹事長より「会員各位の協力により、大学出版部協会のさらなる前進と発展に全力を傾けたい」と力強い抱負が述べられた。

関野利之顧問の乾杯の発声で開宴となり、和やかに賑やかに歓談の輪が広がっていく。恒例の地方会員校の最新状況スピーチ、新人紹介に加え、担当幹事および各部会長から、新年度の抱負などが披露され、大いに盛り上がった後、新任の市川副幹事長の中締めにより、お開きとなった。

▼東京国際ブックフェア二〇〇一

東京有明の東京ビッグサイトで、四月一九日から四日間開催された「東京国際

ブックフェア二〇〇一」は、新世紀の劈頭を飾るにふさわしい盛況となった。入場者は過去最高の昨年を一千人ほど上回る四万八千五百八十一人で、大学出版部協会ブースを訪れた人も五五四七人と、昨年より五百人ほど多かった。

「イタリア年」を記念した「パピリオン」では、イタリア人作家によるトークセッションや関係図書の展示が華やかに行なわれた。また、出版社と書店の「市会」も活発に行なわれ、景気情勢を反映したビジネス色の濃い一面もあった。大学出版部協会は全二六校で一五五一冊を出品、四五一冊（昨年は四三七冊）を販売した。



大学出版部協会の展示ブース

北海道大学図書刊行会

▼小川浩三編「複数の近代」(A5判・五二〇〇円) 中世の法学や領邦観念、アジアにおけるヨーロッパ近代の受容と軋轢、現代の視角からの新たな認識枠組みの提示など、異なるものを対置することにより「近代的なもの」を再解釈する。

北大法学部ライブラリー全六巻の最終巻。▼篠原邦夫・高橋洋志・中村正秋編著「移動層工学―実際と基礎―」(B5判・六〇〇〇円) 粉粒体を大量に取り扱う工業装置・関連操作としての「移動層」は、近年ますます多様化し、新分野への適用が急速に展開されつつある。粉体工学・化学工学・鉄鋼工学など複合・境界領域の第一線の研究者・技術者三千数名が、最新の知識と技術を世界で初めて体系化。

▼布施鉄治著「調査と社会学理論 上巻・実証研究、下巻・理論研究」(A5判・各二二〇〇円) 「総合社会学としての地域社会学」を提唱した実証的社會学者布施の理論体系と、実証研究の全貌を紹介。上巻には四〇年に及ぶ北海道の農村・農民研究の代表的モノグラフを収録。下巻ではマルクス、鈴木榮太郎などを援用しながら、その理論的枠組みを提示。

聖学院大学出版会

▼小出版会は、一九九一年の四月に創設され、二〇〇一年四月で十周年を迎えた。九一年度は新刊二冊を刊行し、一年に三、四冊のゆっくりとしたペースであったが刊行を継続することができた。二〇〇〇年度までに四十二冊のバックリストを持つに至った。▼教員数一〇〇名、学生数三千人に満たない小さな大学に出版部を持つことは冒険であった。特に、小出版会が活動してきた状況は、出版不況のただなかであり、学術書の出版は困難であったが、資金的には、文部省、日本生命財団などの助成金、大学からの出版資金著者などからの寄付により、十年に亘る学術出版活動を続けて来ることができた。組織的には、まだ出版会として自立できず、大学の研究所事務を兼務しながらの活動であるが、担当スタッフは、一名から四名に拡充してきた。▼各方面のご協力とご理解をいただき、十年の歩みを踏まえて、これからもプロテスタント・キリスト教を建学の精神の中心におく大学の「教育・研究の特色を出版物により広報する」という大学出版部のひとつの役割を果たしていきたいと思う。

麗澤大学出版会

▼アミタイ・エチオーニ著／永安幸正監訳「新しい黄金律——「善き社会」を実現するためのコミュニケーション宣言」(本体七八〇〇円)

20世紀は、多様な思想(イデオロギー)がそれぞれの正義を主張して争った大いなる実験の世紀だった。だが、結果として「正義」が地球上に理想社会を実現することはなかった。では、これからの21世紀を果たして希望と再生の世紀とすることができるとか。

究極のテーマに挑んだ著者は、社会学者としての知見を駆使し東西の歴史と文化を縦横に経巡り、「21世紀型社会の理想像」を描き出すとともに、「自由」と「秩序」の共存を核とする新たな道徳律を提言する。

現実政治と公共哲学の統合を企図した画期的なコミュニケーション論である。



『新しい黄金律』
本体7,800円(税別)
A5判・上製・544頁

慶應義塾大学出版会

▼慶大経済学部現代経済学研究会編『**経済学による政府の役割分析**』（三〇〇〇円）高齢化、自由化、国際化の中で、政府の役割が大きな転換期を迎えている。本書は、政府の役割を、ミクロ経済学から中小企業政策までの分野から幅広く分析し、今後のわが国の政府のあり方を示唆する。▼土屋大洋著『**情報とグローバル・ガバナンス**インターネットから見た**「国家」**』（三二〇〇円）本書は「**情報社会論**」ではなく、新しい「**情報国家論**」である。情報化と国際化の波は、社会はもちろん「**国家**」にも押し寄せる。ピラミッド型組織と代表制による「**ガバメント・システム**」に代わる、新しい意志決定・合意形成のあり方として「**ガバナンス・システム**」の可能性を提示する。▼F・ルブラン著／藤田苑子訳『**アンシア・レジーム期の結婚生活**』（二二〇〇円）近世フランスの結婚と家族についてコンパクトにまとめる。意外に多い晩婚・核家族、避妊のはじまりなど、歴史人口学・民俗学・社会学などの成果をとりいれながら、当時の実情を解説する。フランスのロングセラー教科書、待望の邦訳。

産能大学出版部

▼井出眞弘著『**計量経済学**』（三五〇〇円）
経済学は社会生活に役立つ実践的な科学であり、私達の関心は常に将来の経済見通しであろう。政府や企業の政策立案や経営計画作成には数値による具体的情報が必要であり、このような数値化された経済情報を合理的・整合的に得るためには、計量経済学による分析手法が欠かせない。
▼しかし、難しい学問との印象がある計量経済学を、本書は初歩的などころから出発し、筆者の多くの経験による実践的な事例を多く取り入れ、重要な定理や基本的な式の展開は数字に不慣れな読者に消化不良を起こさないようにしていねいに説明している。
▼計量経済学が必要とする統計学と数学の基礎から応用までが整理され、各章末には練習問題も設定されている自己完結型のテキストであり、計量経済学の入門書として最適な書である。

専修大学出版局

▼〈専修大学社会科学研究所社会科学学研究所叢書〉の刊行が開始された。第一巻の専修大学社会科学研究所編『**グローバルバリエーションと日本**』（三五〇〇円）は、変貌する日本のシステム、金融再編、安全確保、地方分権、金融再編、安全保障など法・政治・経済の各分野にわたる現状の報告と変革の提言を行なう。
▼大庭健『**私という迷宮**』（二八〇〇円）。若者だけでなく中高年に至るまでひそかに浸透しつつある「自分探し」。本書では自分探しについて倫理学の立場から、一般読者に分かりやすい書き方で検証をすすめた。さらに異なる専門分野として作家の村上春樹、精神科医の香山リカの両氏からコメントを寄稿してもらい三者により考察を深めた。

大庭健

私という迷宮

倫理学からのメッセージ

村上春樹 香山リカのコメント

『私という迷宮』行を収録

玉川大学出版部

▼立川武蔵編著『癒しと救いーアジアの宗教的伝統に学ぶ』(三八〇〇円) 「様々な形の『癒し』から見てくるのは、それが『聖なる』世界の存在と不可分のものであり、決して心理的解決や、リラクゼーションのレベルにとどまるものではなく、風土、精神的伝統と分かちがたく結びついた、自己を再発見し、世界を再定義するダイナミックな営為だ」といことだ。それにしてもアジアにしてこの豊かな多様性。もう薄っぺらな癒しに逃げ込むのはやめにしないか」読売新聞評

▼藤森武写真集『鉦彫 荒彫』(一六〇〇円) 平安時代の後半を中心に流行し、風の如く現れ、忽然と消え去っていった鉦彫。江戸時代の彫刻家・円空にも影響を与えた鑿痕が、風雪に耐え、いま甦る。



中央大学出版部

▼井上英治『財産法概論「三版」』(三九〇〇円) 財産法の諸制度が現実の取引社会でどのように機能しているかという視点から再構築することをねらいとし、債権法を中心にそれに關わる担保の問題・債権内容の実現の問題・債権保護の問題等を捉えなおす。併せて一九九九年秋の行為能力制度の大幅な改正をも含む。

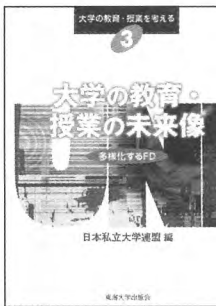
▼池上二志編著『現代の経営革新』(四九〇〇円) 第二次大戦後、企業は科学技術を取り入れ生産システムを変革し、新製品を開発し、現在では共生のため組織変革をはかっている。これらの実証研究を中心とした企業革新、経営革新の諸問題を分析した事業革新・職能革新、最近見られる企業間関係革新の三つの側面からスポットをあてた中央大学企業研究所のプロジェクトによる研究成果。

▼中央大学人文科学研究所編『ケルト復興』(二六八〇〇円) 一九世紀後半から二〇世紀前半にかけてアイルランドを中心として興ったいわゆるケルト復興なる現象について、社会的観点と文学史的観点の双方から文化の深層に迫りつつ、その歴史的な意味を考察する。

東海大学出版会

▼「シリーズ 大学の教育・授業を考える」第3巻『大学の教育・授業の未来像―多様化するFD』日本私立大学連盟編 (A5判・二四八頁・一九〇〇円)

大学改革の核心であり、実行が最も困難なのが、授業の改革である。授業改革はまた、一つや二つの発明で一挙に解決するものでもない。各大学の多数の熱心な教員による幾千幾万の地味で小さな工夫と実践を通して少しずつ変えてゆくしかない。その地味で小さな営為の積み重ねは、これまで不幸なことに教育を研究と大学教員を、根本から変える最も強い力となるに違いない。本巻では大学の教育・授業の変革を試みる多様な実践例が報告されている。



東京大学出版会

二一世紀がはじまろうとするいま、地球環境と人類の将来が深刻な問題になっています。このときにあたり、二〇世紀のはじめに開始され、百年を経過した日本の地形の調査・研究を総括して、環境の基盤をなす地形の性状と生い立ちを七巻の地形誌として刊行することになりました。

日本列島の地形はきわめて変化に富むことで知られ、それが美しい風景の土台をつくっています。自然史と人間活動が刻まれている日本の地形の姿とその形成過程、すなわち地形発達史をこの列島に住む多くの人びとに知っていただき、これからの地形環境の保全・創成や防災や土地利用に、また風景にひそむ歴史を読むのにも役立ててほしいという願いがこのシリーズに込められています。

▼シリーズ『日本の地形』全七巻 (B5判・平均三〇〇頁・上製カバー装)

「4 関東・伊豆小笠原」(六〇〇〇円)、「1 総説」(五八〇〇円)が既刊、「2 北海道」「3 東北」「5 中部」「6 近畿・中国・四国」「7 九州・南西諸島」が引き続き刊行されます。

東京電機大学出版局

手話は独立した一個の自然言語である

本書は、聾教育の黎明期に書かれた、ろう者の思いや教育者の情熱を伝える七編の先駆的な手記と論文から成る。手話はやがて脇に追われ、歴史は再び口話主義を主流となすのだが、「その歩みは、人間の概念が音声言語を中心に編まれていく思想史的な変化であるとともに、また、ろう者の独自性が抑圧され、忘却されていく政治史・行政史的な変化でもあった(東浩紀・読売新聞書評より)」。木村晴美・市田泰弘両氏による「ろう文化宣言以後」や年表・論争概念図などを掲載し、今日の論点とのつながりがよくわかるように工夫された一冊。各方面で反響!

『聾の経験——八世紀における手話の発見——』ハーラン・レイン編/石村多門訳/四六判四五二頁/三一〇〇円(税別)



東京農業大学出版会

△シリーズ実学の森▽
血栓を溶かし梗塞を予防しよう

——脅威の酵素発見—— 栗本慎一郎著
一九九九年一〇月著者は脳梗塞で倒れた。それも注意していたにもかかわらず倒れたのだ。その体験を踏まえた最新の梗塞研究である。実体験と研究データは説得力充分であり、医療行政を考える絶好の書でもある。

平成一三年三月刊/B六判/
一四三頁/本体価格八〇〇円
私の営農哲学

——トマト・メロン・花づくりから地域づくりへ—— 田辺正宜著
施設園芸の生産組合法人組合長である著者は、二度にわたる台風襲来の被害を克服し、発展させた経営の基盤にある哲学を語る。消費者、地域社会、女性の役割などへ向けられている視点が感化されるだろう。

平成一三年一月刊/B六判/
一一六頁/本体価格一四〇〇円
『横井時敬と東京農大』沙漠よ緑に甦れ
『都市、緑と農』租庭長岡安平』に続くシリーズ第五・六集である。

法政大学出版局

▼アルファイ・コーン著／田中英史訳

『報酬主義をこえて』……五八〇〇円
前著『競争社会をこえて』によってアメリカ社会の病根Ⅱパワゲームを批判し、アメリカ心理学会賞を受賞したアルファイ・コーンの待望の新作が刊行されました。本書でコーンは、報酬主義（いわゆる馬の鼻先のニンジン）がいかに不毛であるか、どのような問題を引き起こすかを、家庭、学校、職場のそれぞれについて、徹底的に、具体的に、わかりやすく、しかもさまざまな実験例にもとづいて、科学的に明らかにしています。
通俗行動主義に毒された子どもたちを変え、両親を変え、学校を変え、職場を変え、より人間らしく生きる環境を作るために、ご一読をおすすめいたします。



四六判上製・604頁

放送大学教育振興会

▼平成十三年度の新刊図書は六十五冊。放送大学の十三年度開設科目目三〇四に含まれ、履修登録をした学生たちの手許に三月末日までに届けられた。

▼新刊図書の履修科目登録者数のトップテンは、①『人体の構造と機能』②『疾病の成立と回復促進』③『英語Ⅰ』④『カウンセリング概説』⑤『労働と生活の心理学』⑥『がんの健康科学』⑦『看護学概説』⑧『家族論』⑨『保健体育』⑩『中国語Ⅰ』となっており、心理学・健康科学関連科目の人氣が高い。

▼馬場謙一・橘玲子編著『カウンセリング概説』（一八〇〇円）対人関係の処方箋は、これだけ科学技術が進んでも、だれにでも有効で即効的に効くような錠剤があるわけではない。人と人との関係の中で、生きることの不安、苦痛や孤独、悲しみ、耐えられないストレスを受けたとき、人はどう癒されるのだろうか。

▼引き続き平成十四年度刊行予定の図書は学部用四十三点、大学院用六十五点、計一〇八点。三百名近くとなる執筆陣は取材、執筆、校正にと、おおいそがしである。

明星大学出版部

▼塚田紘一著『子どもの発達と環境——

児童心理学序説』近世に至るまで、子どもは「大人の小さい者」と考えられていた。しかしながら、ルソー（Rousseau, J.J.）の子どもを中心にした児童観によって児童は研究対象になる。ルソーは「エミール」の中で「子どもは大人と違ったもの」であり、不完全な大人としてではなく、子どもとして理解されなければならぬ存在である」と提言した。大人はかつて子どもだったために子どもの心をあたかも知り尽くしていると誤解していた。その誤解を解き、児童の心理が科学的に研究され始めたのは、わずか百余年前に過ぎない。それから児童心理学は日進月歩に発達する。本書では児童心理の最新情報を解説。（目次・抜粋）
第一章 発達の基本的理解、第二章 児童研究の方法、第三章 発達初期の展開、第四章 身体と運動機能の発達、第五章 認知発達、第六章 知能と創造性、第七章 情緒・動機、第八章遊び、第九章 社会性、第十章 自己意識、自己概念、第十一章 親の児童観と教師Ⅱ生徒間の信頼関係。

早稲田大学出版部

▼『マクドナルド化の世界―そのテーマは何か?―』(G・リッツァ、正岡寛司監訳、三〇〇〇円) デイズニールワールド、クレジットカード等、新しい消費手段とマクドナルド化の関係を分析。マクドナルドの第二弾。

▼『アジア太平洋研究選書2』『二一世紀の南北問題―グローバル化時代の挑戦―』(谷口誠、二二〇〇円) グローバル化のもとで途上国は環境・人口・貧困などの問題にどのように対処すればよいのか。新しい南北対話の実現をめざして共通の価値観を探る。

▼『私の一世紀』(ギンター・グラス、林睦實・岩淵達治訳、四八〇〇円) ノーベル賞作家の最新作。様々な「私」がドイツの百年を語る。一年一話のショートストーリーで描く歴史の素顔。



名古屋大学出版会

▼ツベタナ・クリステワ著『涙の詩学―王朝文化の詩的言語―』(五五〇〇円) 平安朝の袖はなぜ涙に濡れているのか? 八代集を、〈涙〉のメタファーの展開過程を辿ることによって読み替える。

▼脇 功訳『アリオスト 狂えるオルランド』(二二〇〇円) 爛熟するルネサンスの想像力が生んだ、波瀾万丈・奇想天外な恋と冒険の物語にして、十六世紀の一大ベストセラー。

▼長尾伸一著『ニュートン主義とスコットランド啓蒙―不完全な機械の喩―』(六〇〇〇円) 社会科学の形成に与えたニュートン主義の影響を、実験哲学の導入に即して初めて本格的に解明した力作。

▼菅沼信彦著『生殖医療―試験管ベビーから卵子提供・クローン技術まで―』(二八〇〇円) 不妊症治療についての最新の知見とその問題点を、生殖医療の流れのなかでわかりやすく解説。

▼西澤邦秀編『放射線安全取扱の基礎―アイントープからX線・放射光まで―』(二四〇〇円) 人体への影響から説き起こし、放射線物理・化学・生物学の基礎、諸法令や緊急時の対応などを解説。

京都大学学術出版会

▼ウェルギリウス『アエネーイス』西洋古典叢書II-10・岡道男・高橋宏幸訳・四九〇〇円/最大のラテン詩人ウェルギリウスが十一年の歳月をかけて綴った壮大な叙事詩全十二歌。ホメロスの二大叙事詩をとりこみ、トロイアの英雄とローマ建国の物語を謳う。時代を経て受け継がれるなかで、文学のみならず美術や音楽などさまざまな芸術に影響を与え続けてきた屈指の大作を、新訳で提供する。

▼『中国近代綿業史の研究』東洋史研究叢刊58・森時彦著・一三〇〇〇円/「綿業の近代化」は、中国における近代産業成立の要であった。本書は、新資料を駆使して、中国の在来綿業が西洋から移植された綿工業との交渉を通じて近代化してゆく課程を通覧する初の成書である。

▼『近代日本と物理実験機器』永平幸雄編著・一〇〇〇〇円/京都大学に残る明治・大正期の三五〇点にも上る物理実験機器は、わが国への近代科学の移入過程を示す貴重な資料である。詳細な写真図版を多用しながらこれらを紹介・考察する。日本の機器史研究の先鞭をつける重要な書。

大阪経済法科大学出版部

▼『大恐慌期のフランス経済政策―一九三六年―一九三九年―』ジュリアン・ジャクソン著／向井喜典監訳／岩村等他訳／五六〇〇円／比較的優位にあったフランスの経済的・金融的地位は、大恐慌以降大きく低下した。人民戦線内閣をはじめとする歴代の内閣が何故に、不況の長期化・拡大に繋がる経済政策を選択したのか。経済政策に関する論議を重点的に分析し、「非合理的な」政策が選択された背景を解明する。

第一部 背景／第二部 政策の過程 政府と野党―一九三六年―一九三九年―／第三部 左翼と右翼の非同調者。

▼『現代行政法入門』山代義雄著／二〇〇〇円／行政法の総論的入門書。組織・原理・展開／行政行為・作用／強制措置／賠償法・補償／申立て・訴訟／資料。

▼『現代社会と人権』増補改訂版』山根共行／村下 博共編／二五〇〇円／大学総合科目のテキストの増補改訂版。労働者・女性・刑法・在日外国人・在日朝鮮人・障害者・同和問題等につき各担当者が執筆。巻末に日本国憲法掲載。人権問題の格好の入門書。

大阪大学出版会

▼松本和彦『基本権保障の憲法理論』(一六二〇〇円) 多様化する現代社会のなかの基本的な人権。それは侵害されてはならないが、他方で共通の利益を守るために制約もされるという相反する性格を持っている。ドイツ連邦憲法裁判所の判例を素材に基本権の構造を探り、実践的に問い直す。日本国憲法下での意義と有用性についても言及している。

▼初谷勇『NPO政策の理論と展開』(一六二〇〇円) 阪神・淡路大震災を契機として、ボランティア活動が顕著となり、いわゆるNPO法の立法議論が高まった。NPO(民間非営利組織)の制度とはどうあるべきか。法制・税制をはじめ個別の公共政策の綿密な実態を調査・分析して、よりよい公共性を追求する。

▼〈大阪大学新世紀セミナー〉は本体各冊一〇〇〇円、月二冊の配本。

4月刊|| 柏木哲夫『ターミナルケアとホスピス』、松田暉『命をつなぐ臓器移植』、5月刊|| 中井貞雄『レーザー核融合―21世紀エネルギーへの挑戦』

荻原俊男・森下竜一『遺伝子は命を救う―循環器疾患と遺伝子治療』

関西大学出版部

▼石川啓著『啓く 拓く 開く』(一六〇〇〇円) 低迷する経済、少子高齢化の急速な進展など、混迷するわが国の社会的環境の中で、二十一世紀を背負って立つ人材をどのように育成すべきであるか。六年間の総合私立大学の学長経験に基づいて家庭、学校、社会の役割を説く。さらに二十一世紀の大学教育、研究、経営について実践的な提言を行う。

▼小川悟著『ジプシー』(二二〇〇〇円) 少数民族集団の歴史の変遷の経緯を追いながら、ルーマニア、ハンガリー、ポーランド、ナチスドイツにおける迫害の跡をたどる。強制収容所におけるロマとシロントイに対する迫害の記述は極めて生々しい。マリア・テレジアの強制同化教育やスイスの同化教育、エジプトでのロマの研究の紹介など、いずれも一読に値する。

▼廣江満郎著『資産効果と財政金融政策』(四〇〇〇円) 本書は、マクロ政策的観点から資産価値の変動による経済効果、すなわち資産効果の役割を理論的および実証的に解明し、その重要性を指摘することを目的とする。

九州大学出版会

▼九州大学政策評価研究会編著『政策分析 2000—二十一世紀への展望—』(B5判・四〇二頁・三八〇〇円) 日本経済を構成する各個別領域でいま生じつつある変化と、それに伴う政策的課題に、多角的・総合的な評価を加える。

▼住田正樹著『地域社会と教育—子どもの発達と地域社会—』(A5判・四〇二頁・五七〇〇円) 近年の急激な社会の変化、特に地域生活の変化が子どもの発達にどのような影響を及ぼしているのかを実証的に説明しようとするものである。

▼木島孝之著『城郭の縄張り構造と大名権力』(A4判・六八二頁+折込二七丁・一七〇〇〇円) 西南地域大名領を事例に、本城・支城の縄張りを可能な限り視覚的に明らかにして、城郭の類型と大名の政治的・軍事的特質との関係を解明する。

▼井口正俊・岩尾龍太郎編『異世界・ユートピア・物語』(四六判・二五二頁・二四〇〇円) (ユートピア)は現実を改造する近代社会の思考様式と深い関係をもった。西欧文化の各時代・地域におけるユートピア譚の特徴を探り、更に東洋・日本の異世界思想との比較を論じる。

東北大学出版会

▼タッド・ホールデン、阿部宏編著『記号を読む』(B5判、一六二頁、二〇〇〇円) 「日の丸」を見た時、私達は何を思い浮かべるだろうか。この本は、このような日常生活の中にある何気ない事柄を題材に、記号とは何かを考え、さらに、記号をキーワードとして、言語、文化、社会を読み解こうとするものである。記号が、言語、文化、社会の間をどのように行き交い、またこれらの領域がどのようにに影響し合っているのか、記号が人間行動の基礎を作っているという仮定の下で、文化社会現象を分かりやすく具体的に分析する。

▼細谷純著『教科学習の心理学』(A5判、二五〇頁、二七〇〇円) 本書は、一九九六年に中央法規出版から出版された同名の書の増補版である。著者の多くの著作のうち、書名に関するものを収録した。著者は、傍観的・中立的な研究者ではなく、教師と学習者の中に望ましい価値が実現することを願って実践的に行動する、生きた学問の追究者である。実際に教育に携わる人また教育研究を志す人にとって必読の書である。

流通経済大学出版会

▼『JRは2020年に存在するか』

角本良平著(A5判・三〇〇〇円)

JR本州三社の今秋完全民営化に向けての具体的な準備作業が始まった。本書は元国鉄マンの著者がJR移行後の十五年間を技術と経営の両面から総括し今後の課題を提起したものである。確かにこの十五年はJR各社とも予想以上の好成績で推移した。しかしその内容を見ると技術の面でも経営の面でも旧国鉄時代に培っていたものが実を結んだ所謂「JR前効果」の寄与が少なくなかった、と著者は分析しているのである。その上で今後は、航空機や自動車などの競争が激化する中で利用者の増加は望めそうにない事から一層の「経営の効率化」が求められるだろうと予想している。その方向としては、組織の再分割(分社化)、運賃体系の見直し、不採算路線の他手段への代替え、労働組合の動向への適切な対応等を提言している。また整備新幹線についても上下分離方式の採用によってJR自身への影響は旧国鉄時代のようなことは無いにしても、対応を間違えれば経営を危うくし兼ねないと指摘している。

三重大学出版会

ジミー・ウォーカー著、松岡典子訳『戦争捕虜二九一号の回想―タイメン鉄道から南紀イルカへ』(A5判・二五六頁・一二〇〇円) 第二次世界大戦中、英国より出征してきた兵士たちは、シンガポール到着後わずか十日で捕虜となりタイメン鉄道建設の重労働に就かされる。その後さらに三百名の英国兵士が、日本は三重県の山中「イルカ」村に送られ、銅山採掘に従事させられる。一年四か月の労働の後終戦を迎え、彼らはイルカに十六名の墓碑を残し、英国へ帰還した。それから四十七年。共に銅山採掘をした南紀のかつての中学生たちに日本へ招かれた元英兵たちは……。

ウォーカー氏は一介の兵士であり、彼の回想記は、彼の身の回りの出来事を書き綴ったものに過ぎない。だが物不足の兵営で文案を練り、記録を綴り、ニュースを発行する彼を見て、英国民なら「ハレルヤ」というだろう。過酷な体験を良識化できる人に幸い有れ、というわけだ。その回想記を読むと、戦争が反面、非常に個人的な体験をもたらすものであることを痛感する。

関西学院大学出版会

▼圃田浩二『誰が誰に何を売るのが――援助交際にもみる現代社会の性・愛・コミュニケーション』(四六判上製・三二〇頁・三八〇〇円)

援助交際とは何か。男と女の間でほんとうは何が交換されているのか？ 現代社会における性・愛・コミュニケーションを綿密なフィールドワークに基づいて検証する。

▼村上陽一郎・中村桂子・森岡正博・山極寿一・波平恵美子他

『生命科学と倫理』――二一世紀のいのちを考える――(A5判並製・二四〇頁・二二〇〇円)

遺伝子操作が可能なこの時代に私達のいのちとは誰のものなのか？ 現代における生命の行方を探る。

▼ジム・コンセディン／ヘレン・ポーエン 前野育三監訳

『修復的司法』(A5判並製・二八八頁・予価三二〇〇円)

少年司法の新しい可能性を探る。

▼山本剛郎

『地域生活の社会学』(A5判並製・二三五頁・三二〇〇円)

▼第二二回日本生命財団出版助成図書
刊行期間 平成一三年四月～一四年三月

『ニホンザルの自然誌―その生態的多様性と保全』

大井徹(農林水産省森林総合研究所主任研究官)・増井憲一(自然の会代表)編著
東海大学出版会

『第四紀逆断層アトラス』

池田安隆(東京大学大学院理学系研究科助教)ほか編
東京大学出版会

『江戸幕府御用金の研究』

賀川隆行(財団法人三井文庫研究員)著
法政大学出版局

『近畿地区・鳥類レッドデータブック―絶滅危惧種判定システムの開発』

江崎保男(姫路工業大学教授)・和田岳(大阪市立自然史博物館学芸員)編
京都大学学術出版会

* 日本生命財団は優れた研究成果でありながら出版の困難な学術専門書を対象に大学出版部協会加盟出版部に出版助成を行っている。

■僕の息子は時計の修理工をしている。しかもアナログ。親父がデジタル大好き人間だから、その反動かも知れない。とはいえ僕も子供の頃は、いろいろな機械を分解するのが好きだった。とくに腕時計は、歯車がたくさんあるし、その精度に、金属の輝きに魅了されたものだ。

■それに比べると、デジタル機器というものは分解しても面白みが少ない。パソコンのマザーボードに目を近づけて、蟻になったつもりで見上げると、CPUやメモリの列が未来都市の景観のようで、それなりに美しいが、それ以上のもではない。

■だから、フロッピーも分解したりしない方がいい。開けてみても、ペラペラしたプラスチックの円盤が一枚入っているだけだ。「フロッピーの中を見よう」というのは、もちろん「分解しよう」ということではなく、「中のデータを見てみよう」ということである。

■自分でDTPをやる編集者であれば、言われるまでもなくデータを见なければならぬ。

加工しなければならぬのだが、DTPであれCTSであれ、組版を外注している場合には、著者から受け取ったFDをそのまま印刷所に渡してしまうケースが圧倒的に多いはずだ。

■プリントされた原稿に問題がなければ、データも問題ないだろうと思うのはむしろ自然なのだが、実はそうではない。データが入っていないということさえある。エイリアス(ウインドウズではショートカット)が入っていたというケースもあった。逆に、同じファイルがいくつも入っていて、どれが最新版なのか判断がつかないというような

こともある。その確認のためだけでも、一度は開いてみる必要があるのだ。

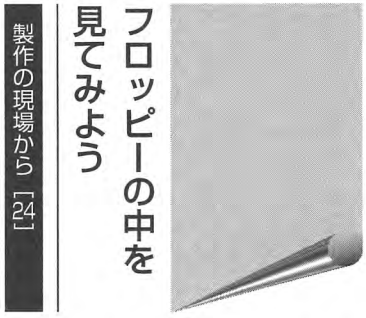
■さらに、ファイルをテキスト化してみることによって、使えるデータと使えないデータがはっきりする。極端な例だが、プリントではきれいな二段組になっているものの、上段の一行目を打ち、段間にスペースを打つて、次は下段の一行目というような打ち方がされている場合、このデータが使いものにならないのは当然だ。それほど極端ではないにしても、引用文の字下げにインデント機能を使わず、スペースで処理してくる著者はあいかわらず多い。

■活版時代からの習慣で、僕は版下段階までを組版と呼び、その料金を組版代と称しているが、その内容は活版とCTSないしDTPでは全く異なっている。活版の時代には、入力は一〇〇%印刷所の仕事であったし、組版自体が熟練と多大の労力が必要としたのだが、現在では、入力ほぼ著者の仕事であり、文字だけの棒組であれば、組版

はテンプレートにテキストを流し込むだけだ。むしろ大変なのは、テキストの整形と赤字の差し替えなのである。

■言い換えれば、内容的に完全原稿で差し替えの必要がなく、そのまま使えるきれいなデータであれば、作業効率は格段に向上する。組版代も安くなって当然だ。四月一六日付の『朝日新聞』に取り上げられた未来社・西谷氏の主張も、組版代の削減をめざすとともに、「データの質に関する著者・編集者の意識の改革を訴えたものであろう」。

■学術専門書の出版が困難になってきている。しかし、困難だ、困難だと言うだけでは事態は改善されない。少しでも原価を下げるためには、著者にも協力して貰う必要がある。ワープロ段階で完全原稿にするための情熱すら持てないような著者の本を無理して出す必要はあるのだろうか。入力約束手事にして、それほど難しいことではないのだから、それを著者に要求するのは、決して出版社の傲慢ではないと思っ



フロッピーの中を 見てみよう

製作の現場から [24]

(不勞平)

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会

060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

聖学院大学出版会

362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

麗澤大学出版会

277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 0471-73-3331 FAX 0471-73-3154

慶應義塾大学出版会

108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3454-7029

産能大学出版部

152-0035 目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル
TEL 03-3724-9101 FAX 03-5701-7499

専修大学出版局

101-0051 千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

玉川大学出版部

194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部

192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

東海大学出版会

151-0063 浜谷区富ヶ谷2-28-4 東海大学校舎内
TEL 03-5478-0891 FAX 03-5478-0870

東京大学出版会

113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局

101-8457 千代田区神田錦町2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会

156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

法政大学出版局

102-0073 千代田区九段北3-2-7
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

放送大学教育振興会

105-0001 港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F
TEL 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482

明星大学出版部

191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

早稲田大学出版部

169-0071 新宿区戸塚町1-103
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

名古屋大学出版会

464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

京都大学学術出版会

606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部

581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

大阪大学出版会

565-0871 吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

関西大学出版部

564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

九州大学出版会

812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172

東北大学出版会 (準会員)

980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-225-2029

流通経済大学出版会 (準会員)

301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

三重大学出版会 (準会員)

514-8507 津市上浜町1515 三重大学出版ホール内
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

関西学院大学出版会 (準会員)

662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-5233 (内線3475) FAX 0798-53-9592

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会

060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

聖学院大学出版会

362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

麗澤大学出版会

277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 0471-73-3331 FAX 0471-73-3154

慶應義塾大学出版会

108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-6928 FAX 03-3454-7029

産能大学出版部

152-0035 目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル
TEL 03-3724-9101 FAX 03-5701-7499

専修大学出版局

101-0051 千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

玉川大学出版部

194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部

192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

東海大学出版会

151-0063 渋谷区富ヶ谷2-28-4 東海大学校舎内
TEL 03-5478-0891 FAX 03-5478-0870

東京大学出版会

113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局

101-8457 千代田区神田錦町2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会

156-8502 世田谷区糞丘1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

法政大学出版局

102-0073 千代田区九段北3-2-7
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

放送大学教育振興会

105-0001 港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F
TEL 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482

明星大学出版部

191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

早稲田大学出版部

169-0071 新宿区戸塚町1-103
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

名古屋大学出版会

464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

京都大学学術出版会

606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部

581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

大阪大学出版会

565-0871 吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

関西大学出版部

564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

九州大学出版会

812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172

東北大学出版会 (準会員)

980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-225-2029

流通経済大学出版会 (準会員)

301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

三重大学出版会 (準会員)

514-8507 津市上浜町1515 三重大学出版ホール内
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

関西学院大学出版会 (準会員)

662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-5233 (内線3475) FAX 0798-53-9592